

目次

序文	iii
謝辞	v
略語	vi

序章		i
第二章 『不完全競争の経済学』		25
第三章 『一般理論』発行の直前と直後におけるジョーン・ロビンソンとその仲間たち		39
第四章 ジョーン・ロビンソンの説くマルクス		57
四・一 序		57
四・二 マルクスに関するジョーン・ロビンソンとドップのやり取り		60
四・三 カレツキとジョーン・ロビンソン・マルクスに関連して		78
四・四 『マルクス経済学』に対するケインズの反応		82
四・五 『マルクス経済学』の後		89

第五章 高尚な理論の時代におけるジョーン・ロビンソンと社会主義的計画	99
五・一 はじめに	99
五・二 市場構造	104
五・三 ケインズとカレッツキ	103
五・四 計画	113
五・五 予算編成…「赤字財政は、政策の改革であり、革命ではない」	115
五・六 価格決定と分配	117
五・七 金融政策	120
五・八 失業の役割	121
五・九 国際収支	123
五・十 結論	128
第六章 『資本蓄積論』の発達過程	131
第七章 経済全体としての技術の選択と、資本理論に関する ケンブリッジ・ケンブリッジ論争…ジョーン・ロビンソンの役割	173
第八章 『資本蓄積論』後…防衛と発展	203
第九章 政治経済学としてみた開発経済学についてのジョーン・ロビンソンの見解	243
九・一 経済成長理論の延長としての経済開発	246
九・二 中国	243

第十章 『ロビンソン現代経済学』…消えゆく灯か	277
-------------------------	-----

第十一章 関心を持ち続けた知識人の仕事

…ジョーン・ロビンソンの一般向けの三冊の本	317
-----------------------	-----

十一・一 『経済学の考え方』 (1962b)

十一・二 『経済学の曲り角』 (1966b)

十一・三 自由と必要性…『社会史入門』 (1970)

十一・四 価値と科学

330 327 323 318

第十二章 結論…ジョーン・ロビンソンの遺産	345
-----------------------	-----

訳者あとがき	389
--------	-----

索引

原注

参考文献

付録 ジョーン・ロビンソンの中国に関する著述

53 34 9 1

第二章 『不完全競争の経済学』

ジョーン・ロビンソンが『不完全競争の経済学』(Robinson, 1933a)を書くとした頃に、リチャード・カーンとの長きにわたる知的親交も始まった。それとほぼ同じ頃にカーンは、ケンブリッジ大学キングスカレッジのフェローシップを請求するために、素晴らしい論文となった『短期の経済学』(Kahn, 1929; 1989)を書いていた。その時には、経済学を学び始めてから一年しか経っていなかった(Harcourt, 1991; 1993)。ジョーン・ロビンソンがスラッファの行った注目すべき「上級価値理論」の講義の幾つかを聴講したことは、ほぼ確かである(Marcuzzo, 2005を参照)。その講義は、一九二〇年代の終わりと一九三〇年代の初めに行われた。一九二〇年代の初めに学部生であったジョーン・ロビンソンは、A・C・ピグーや、デニス・ロバートソン、それにとりわけジェラルド・ショーフによる講義や著作を通じて(ショーフの場合は、著作はほとんどないが)、マーシャルやピグーの価値理論の内容を熟知していた。ジョーン・ロビンソンのガートン・カレッジでの指導教官であったマージョリー・タッパン・ホランドも筋金入りのマーシャル信奉者であった。ジョーン・ロビンソンは、その指導教官とは気が合わなかった(第一章、注6を参照)。オースティン・ロビンソンは、『産業構造の基礎理論』(1931)に取り組んでいた。その本は、名目上はケンブリッジ・経済学ハンドブック・シリーズのための教科書であったが、実体は企業論に

ついでに独創的で革新的な研究論文であった。(そのことは、ジョン・ホイテカー(1989)が指摘している。またHarcourt (1997a, 2001a) も参照。) オースティン・ロビンソンがその本に取り組んだのは、恐らく、ジョン・ロビンソンが『不完全競争の経済学』を書き始める前であったかもしれない。それと同時に並行的であったのは確かだろう。(先に述べたように、ジョンとオースティンは一九二六年に結婚して、二年間インドに滞在し、ケンブリッジに一九二〇年代後半に戻った。)

現在では知られていることだが、スラッファの講義は、それまでジョン・ロビンソンが教育されてきたような見解に対して極めて挑戦的であった。それでも、スラッファ自身からみれば、講義内容はかなり抑制されたものであった。スラッファは講義の準備にかなり長い期間を要することになったが、それと時を同じくして一つの行動を起こし始めていたという証拠がある。その行動は、実質的には、古典派政治経済学のアプローチを復活させ、新古典派経済学のアプローチを否定するという生涯の研究課題につながるものであった。新古典派経済学のアプローチの否定という点では、マーシャルとピグーがケンブリッジにおけるスラッファの主要な対象であった。スラッファの講義内容の多くは一九二五年の論文と一九二六年の論文の議論を取り込んでいたが、それらの論文は、スラッファがイタリア人解説者を通じて身に付けたマーシャル理論についての訓練から生まれたものである。しかし同時にスラッファは、グラムシの影響を受けたこともあって、価値や分配理論に関する古典派政治経済学者やマルクスの教え、それに他のヨーロッパ大陸の有力者、なかでもワルラスとパレートの教えを吸収していた。スラッファの講義には、無差別曲線や基数的効用から序数的効用への移行に関するパレートの解説も含まれていた。効用という概念は、スラッファにとって既に許し

難いものとなっていた。それは、彼が価値理論において少なくとも原則として数量的な計測や物理的存在に、傾注していたからであった。特に二つの伝統的流派における費用、さらに経済理論全般における費用の意味に傾注していた。⁽¹⁾しかし、スラッファは新たな出発をどのような形で厳密に発展させられるかに関して全く不確かであったことから、初期段階にあったその研究は講義録自体にはほとんど姿を現していない。

しかしながらスラッファは、実際の環境における価格形成を理解するために部分均衡分析を用いても、その実用性は極めて限られるという見解をはっきりと持っていた。すなわち、その手法を論理的に筋の通ったものにするには、供給の条件が必要の条件から独立していることを保証する必要があるが、そのような厳格な条件が実際の状況において満たされるのは非常に稀であるということである。(これが、一九二五年論文と一九二六年論文の主たる論旨であった。)このことは、一九三〇年に『エコノミック・ジャーナル』誌上で行われた代表的企業と収益増増に関する討論会におけるスラッファによる明確な主張につながった。彼の主張は、マーシャルの理論を見捨てるべきであるということであった (Sraffa, 1930, 93)。スラッファは、競争条件の下での収穫に関する法則の本質について古典派の著作から知識を得ていたことから、その頃までには、マーシャルや特にピグーによる試みを否定するようになっていた。彼らの試みとは、古典派理論の中の別の仕切られた部分で起きる収穫増増と収穫増減の概念を取り上げて、出現しつつあり、実際に出現した新古典派の価値理論の中で、それらの考えを結び付けることであった。

ジョーン・ロビンソンに非常に大きな影響を与えたスラッファの「含蓄のある主張」も、彼にとつては余談であった。その主張によれば、価値論の出発点は、純粹(あるいは、完全)競争ではなく独占とすべきで

第四章 ジョーン・ロビンソンの説くマルクス

互いに話し合える専門用語を二つの党派が採用することができるのは確かだ。だが実際には、どちらの党派もそうすることを望んでいない。なぜなら、主義・信条を語る上で慣れ親しんだ言葉を翻訳するとなると、その過程でイデオロギーの理解が失われる可能性があるのを恐れるからである。

Robinson (1973b, 247)

四・一 序

本章では、ジョーン・ロビンソンがモリス・ドップとの問答を通じてマルクスに関する初期の見解を形成したことを考察する。次いで、その見解が当時カレツキやケインズ、それに何人かの評論家にどう受け止められたかをみる。また、彼女がマルクス経済学について持ち続けた見解も検討する。『マルクス経済学』⁽¹⁾(Robinson, 1942b)は、重要な本である。『マルクス経済学』は、マルクス主義経済学の理論と、正統派経済学理論あるいはケインズ経済学理論との折り合いを付けることを狙った、経済学者による数少ない真剣な取り組みの一つである。正統派経済学者とマルクス主義経済学者が語り合った主な分野は、しばらくの間

は価値を価格に変換する問題であった。ジョーン・ロビンソンは著書で、マルクスを総合的に論じる上で「価値」は必要ではないと主張した。恐らくそのことは、『資本論』の他の面に関心を向け直させるための彼女の戦略であった。著名な経済学者がマルクスを真面目に取り上げるのは異例なことであった。(もつとも、ポール・スウィージーは、マルクスに真剣に取り組んだ。彼女の同僚のモーリス・ドップやピエロ・スラッファも同様であった。)ジョーン・ロビンソンは、ケインズの雇用と有効需要の理論と、マルクスの危機の理論との間には、ある程度共鳴するものがあるだけでなく、問題とすべき適切な今日的論点をマルクスが呈示したことは、当を得たものであると直感的に思った。⁽²⁾彼女がマルクス主義経済の調査に乗り出すことになったもう一つの要因は、マーシャル流の正統派から脱却しようとしていたことであった。従って彼女の『マルクス経済学』には、正常利益率に関する正統派の理論に対する批判が含まれている。ジョーン・ロビンソンは、マーシャルから離れる方策を探って、より古典的なアプローチへ移行していった。それは、例えば『ローザ・ルクセンブルグ序説』(Robinson, 1951a)や『資本蓄積論』(Robinson, 1956a)にみられる通りだが、根底にはマルクス経済学の知識があった。ジョーン・ロビンソンがマルクスに関心を持ったのは、資本主義社会の不平等に取り組む「本物の」経済学を創り上げたいという気持ちがあったからだ。しかしながら、その本の調査と執筆にかけた期間は半年足らずであり、自分の解釈を反芻し熟慮する時間は、ほとんどなかった。(それが、『資本論』についての彼女の解釈が極度に単純化されている理由の一つであろうもつとも、マーシャルの解釈についてはそのようなことはなかった。)ジョーン・ロビンソンとドップの間の意見交換や、その後にマルクス主義者の評者によってなされた『マルクス経済学』の評価は、当時のイギ

リスにおける知的論争の文脈の中でみるべきである。知性的な考え方を支配していたのは、論理経験主義であった。それと同時に、イギリスには急進主義の伝統があり、それはマルクス主義の理論構成に反対していた。ケンブリッジでは、左派勢力の間においてさえ自由急進派とマルクス主義者の間に溝があった。そのマルクス主義者の中には、ジョーン・ロビンソンの同僚であるモリス・ドップとピエロ・スラッファがいた。ピエロ・スラッファも彼女の親密な友人であった。

ドップは、一九三五年に「現代経済理論の幾つかの傾向に対する批判」と題する講義をコペンハーゲンの経済学会で行った（公刊されていない⁽³⁾）。ドップは、正統派経済学に必ず出てくる抽象概念や関連性の現実⁽³⁾に注目し、次のように主張した。それらは、社会の考えや出来事の基本的事項を正しく伝えていない、あるいは、伝える対象にすらしておらず、そのような理論から、物質的、社会的、経済的な世界に関する結論や含意を導くことはできない。ドップは、概念や操作の現実性を重視し、また演繹法を超えて理論を展開した。ドップによるジョーン・ロビンソンのマルクス解釈に対する応答の根底には、そうしたことがあったのである。その時までに、スラッファは、概念と操作の両方について手法上の現実主義を有する満足⁽⁴⁾のゆく理論についての独自の基準を展開しつつあった。スラッファからみれば、演繹法は科学的な議論に欠くことができないが、それだけでは、社会経済的な現実を分析して、説明力のある首尾一貫した理論に到達するのには十分ではない。この故に、演繹法は、観察される現実に基づかない抽象概念と同様に、論拠としては不十分なのである。スラッファの考えは、ドップの主張に形式的な基準をいくらか与えている。